



59年前の浜中村の写真。海岸にあった漁師小屋はひどい飛砂で埋もれている。

砂の村

1346年ごろ、秋田から京都朝廷へ銅を運んでいた船が日本海で難破。船は越後国岩船郡中浜（現在の新潟県村上市中浜）に漂着したが、積荷の銅が一夜にして消え失せた。誰が盗んだか分からない。憤慨した朝廷は「犯人不明の際は部落全員を打ち首にする」と言い伝えた。集落全滅を逃れるため、庄屋の早坂九郎左エ門、余語庄右エ門、そして小林庄助が罪を被って逃亡した。そうして彼らが逃れつた先には、とうとうと水が湧き出る場所があった。故郷の「中浜」に思いを馳せ、「浜中村」と名付けて定住した。

浜中村の主な生業は製塩だった。砂丘は黒々とした広葉樹林に覆われ、海水を焚く燃料は豊富だった。しかし、開村から200年経つと、戦国時代の度重なる戦乱と製塩による伐採のために森は荒廃した。激しい海風が丸裸になった砂丘の砂を巻きあげた。砂は容赦なく村

を襲う。田畑は不毛の地となり、河口が埋まって洪水が起きた。江戸時代に入ると村人は砂防のために植林を始めたが、苗木が根こそぎ飛ばされたり砂に埋もれたりして遅々として進まなかった。

1670年ごろに地引き網漁が伝えられると、イワシやマスが面白く獲れた。村はたちまち栄え、増加する人口を支えるべく開田が始まった。開墾した田んぼを風から守るために村人は総力を挙げて植林に取り組んだ。「無断に伐採した者、並びに部落内に遊女を連れ込んだ者は罰として松苗を植えること」という村の掟まであった。明治の中頃を過ぎると、漁獲量が激減。同時期に砂防林が完成したことで田畑が耕作しやすくなり、漁師から農家へと転換する者が増えていった。しかし、昭和の大戦によって砂防林は衰退。砂の被害は再び激化した。当時はどの家にも「砂箱」とよばれる木箱があり、家の中に砂がたまると砂箱に入れて背負って海ま



1.浜中から南を臨む。西側には日本海。東側の砂丘は黒松林に覆われている。2.「小林直太郎農園」四代目の小林忍さん。3.浜中集落の寺「正常院」の提灯。寺を挟んで海側が漁師の町で、山側が農家の町であることに因んで住職自らデザインした。

日本最長の砂丘は山形県酒田市にある。最上川が運んだ砂が海から吹き付ける強い季節風によって堆積し、35kmにわたる庄内砂丘を造り出した。砂丘には黒松林が縞状に伸び、松林に挟まれたビニールハウスは夏の日差しを反射して輝いている。国道沿いには「メロンあります」「産直メロン」といったのぼりが立ち、直売所が点在している。しかし目指す店はここにはない。国道から細い道を曲がって「浜中集落」に入る。風から家を守るために、家屋は木の皮でできた板やコンクリートブロックでぐるりと囲われている。何度か角を曲がった先に、「小林直太郎農園」を見つけた。園主を務めるのは四代目、小林忍さん(42)だ。「直太郎」とは彼の曾祖父であり、この家の屋号でもある。集落には「小林」が多く、「直太郎さんの家」と言わなければ伝わらない。約670年前にこの地を開村したが小林家だったからだ。